

シヤム国王の欧州紀行

小泉順子(京都大学)

1. はじめに

チュラーロンコーン/ラーマ五世王 [1853年—1910年、在位 1868—1910年]

四世王モンクットの第9子

「チャクリー改革」

統治制度改革 ⇒ (領土喪失) 独立維持として評価

在位中の“外国”旅行

- ① 1871年3月9日～4月15日：シンガポール、ジャワ
- ② 1871年12月16日～1872年3月16日：シンガポール、インド等
- ③ 1896年5月9日～8月28日：シンガポール、ジャワ
- ④ 1897年4月7日～12月16日：ヨーロッパ
- ⑤ 1901年5月上旬～7月中旬：シンガポール、ジャワ
- ⑥ 1902年2月22日～2月27日：シンガポール
- ⑦ 1907年3月27日～11月17日：ヨーロッパ

2. 1897年欧州歴訪

政治的背景：1893年「シヤム危機」後 フランス保護民問題 ⇒ ロシアに仲介依頼

国内留守番体制：サオワパーポーンスー皇后を”Regent”に任命
王弟他5名からなる諮問委員会

随行者：王弟 3名、役人 13名(5名は特定の官職なし)、留学する王族等の子供 19名

目的： 5月12日 船上で上陸後の心得：

仏教の教えを守り怠惰を避け、勤勉・努力を奨励
海洋の学、教育・統治、国境防衛面での繁栄を学ぶ
同じ人間であることを強調

旅程：ベニスにはじまり、イタリア、スイス、オーストリア・ハンガリー、ポーランド、ロシア、スウェーデン、デンマーク、イギリス、ベルギー、ドイツ、オランダ、フランス、ポルトガル、スペインの各地 (一部公式・一部は非公式)
各国君主・首脳等と会見

3. サオワパーポーンスー皇后宛書簡にみる「帝国」

背景 1897年欧州訪問の記録

- ・日誌 Phraya Sisathap (Seng), 1997 (1907). *Chotmaihet sadet praphat Yurop Ro So 116*. Bangkok: Krom Sinlapakon.
- ・公文書記録

・サオワパーポーンシー宛書簡集 全旅程 62 通

サオワパーポーンシー皇后

正妻 4 名 すべて国王自身の異母妹 (内 1~3 は姉妹同士)

1. スナンタークマーン 1860-1880 年
2. サワーンワッタナー 1862-1955 年
3. サオワパーポーンシー 1863-1919 年
4. スクマーンマーラシー 1861-1927 年

親王

ワチラーウット(六世王) & プラチャーティポック(七世王) 英 陸軍士官学校留学
ピサヌロック親王 イギリス留学、1898 年からロシア留学
ナコンラーチャシーマー親王 翌年からイギリス留学
ペッチャブーン親王 後にイギリス留学

関心の対象

◎王家との交流

- ・ 7 月 1 1 日付@ペテルゴフ

今朝の朝食には、正族がみな集まり、おしゃべりして大変親密な雰囲気だった。皇太后は泣き出さんばかりであった。そして今日から私は喜んで彼女の息子となり、彼女は私の母となった。いつも彼女が私にキスをしたが、今日は私の母となった彼女がほほを差し出し、私が彼女にキスをした。彼女の子供は、息子も娘もみな兄弟姉妹となった。

- ・ 7 月 2 7 日@Keil 河口、マハーチャクリー号船上 (デンマーク訪問をふりかえって)

私は、彼らの孫まで、三代にわたり知りあい、友人となることができ大変うれしく思う。もし私がイギリスやギリシャを訪れれば、家族全体と知り合うことになる。・・・今後は、よいことも悪いこともみな知らせあい、そうすれば出来る限り助け合うことができる。先日はニッキー[ニコライ二世]と協力することができた。ニッキーは、タイの問題で心を痛め、喜んで助けてくれた。しかし今回はニッキーとすでに友人であったために容易に助けを得ることができたのだ。

◎王族の個性

- ・ 7 月 1 4 日付@ストックホルム

この国王は、愛情や好意を (ロシア) 皇帝よりもさらにあけっぴろげに表現する。到着した初日から 6~7 回接吻攻めである。まずは迎えにきた船上で 1 回、そして今度は船が港に到着して 1 回、それから宿舎の部屋につくとまた 1 回。(中略) どこか展示会をみにいたり、一緒に歩いてどこか行くときは、レディのように手をとらねばならないようだ。おかげでジャワにいったときのようにとても疲れる。(中略) 陶器をみにつれていってもらったときのことだ。私が見ているときに、無理やり[私を]引っ張って突き進もうとして身体を翻したものだから、服の端が陶器に当たり割れてしまった。こういう話をきくと、彼は頭がいかれていると思うがそうではない。こういう人間なのだ。

- ・ 9 月 5 日付@エッセン

・・・ロシア皇帝は、口数の少ない人間であり、自ら熟考した案について口にだして指摘することはないが、いつも黙って静かに実行にうつしていく人物であったことがわかった。私はロシア皇帝とその深い知性に対して高い尊敬の念を抱いている。

しかしドイツ皇帝はといえば、彼の言動や性格、われわれの国の統治に対する態度を観察したところ、あまり確かではなさそうだ。

・6月7日付@ローマ 女性に注目

・ローマでは、王妃がすべてをとりしきっている。彼女はとても賢い。会話していて、話題がどこにいこうとも、すべて理解する。……他方男といえば、国王はなんとも言いがたい。容貌は目と眉の間にしわをよせ、ほほはだらりとたれている。……何か命じてもはつきりせず、策を練ったようには思えない。……実際、この宮殿の真の主は王妃である。国王が誰と謁見をするかは彼女の判断次第である。

◎王族の墮落と臣民との関係

・6月29日付@ブダペスト(No. 34)

随行した王族・役人の行動を批判して・

……われわれには本当に使えるよい人材がない。かといって、ヨーロッパの王族はとくに卓越したところがあるわけではなく、実際われわれにはかなわない。それなのに、われわれの王族が西洋の王族のようになりたいと考えれば、次の世代は衰退するだろうと懸念する。だが、私は子供たちみなにこの真実を分かるまで教えるつもりだ。

・6月29日付@ブダペスト(No. 35)

……実際エンペラーと王族とは互いに嫌っているようだ。なぜならば彼ら王族はあまりに王族であり、それぞれが勝手をして畏れることがない。われわれが昔、誰の娘でも連れてくることができたときのことのようなのである。酒のみ、女遊びにふけり、殺生もする。軍事に優れたものは一人もなく、民事でも何もできない。私も王族だが、あのようなさまは決して模範にすべきではない。

・7月22日付@バルト海 マハーチャクリ号 コペンハーゲンへ

各国における王族と臣民との関係は、それぞれ異なっている。イタリアでは人々は王族を慕い尊敬している。自由に外出し、国王がどこへいこうとも、人々は帽子を挙げてhurrayと叫ぶ。通りを歩けば、押しのけてくることもあれば、車に近寄ることもある。そして車に書簡を投げ入れたり、手で直接書簡を国王に渡すことも可能である。教養のある王族も多数いる。とくにマルゲリータ妃は美しく教養があり、人々の敬愛を集めている。しかし国王(ウンベルト一世)といえば、あまり賢くない。だが親切で慈愛に篤い。(中略)

オーストリアではエンペラーがもっとも力をふるっている。かれは慣習を厳格に守り、揺るがない。……鋭い人物とはいえず、無口ではあるが、誠実である。実際は、学術や政治にはつうじていて知識がある。……国中みな彼を神のように畏怖し、尊敬している。(中略)もしも皇帝が亡くなれば、ハンガリーでは独立しようと反乱が起きるのではないかとひどく懸念される。なぜならば、王族の中にエンペラーほどの[有能な]人物がないからだ。みなそれぞればらばらで、結婚式か葬式以外では100日も1000年も顔をあわせることがない。兄弟姉妹は別々で団結しようとしなない。ここでは王族と平民とは雲泥の差で、イタリアとは大きく異なる。(中略)

ロシアについてはすでにずいぶん述べてきた。エンペラーは儀礼も派手なことも好まない。細かなことは気にせず、威風堂々として威厳がある。王族は、高位のものも低位のものも、皇帝に畏敬の念をいだき、みな愛し合い団結し、冗談をいいあつて笑いあっているようだ。(中略)皇太后といえば、すべての人々の母親といってもよい。その風格、威厳、そして人柄、教養、いずれも私は敬愛してやまない。平民や役人は、みな皇帝を恐れている。われわれの臣民が王族を恐れる以上だ。(中略)

スウェーデンでは、人々はイタリアよりもさらに自由である。なぜならすでに共和制へむかっているからだ。国王は誰に対してもよかれとふるまいおもねるために、何をいってもあまり重みをもってうけとめられない。でかけても、だれも帽子をとって挨拶しないし、何か命じるときにはあわててバタバタとしている。・・・実際にはとても親切な人だが、安定さに向け、ものごとをきちんと覚えていない。役人も、統治もみな同様だ。

ノルウェーではなにか大きな事件がおきるにちがいない。国王の話では、人々は、リパブリックになりたいと切望しているという。

◎リパブリックと王朝

9月11日@パリ

・・・貴女が私のパリ訪問を心配したとしても、私自身の心配の方が10倍も大きかったことを理解してほしい。なぜなら私自身、訪問する本人だったからだ。しかしパリ到着時から大変な歓迎を受けた。大統領が私に同行し、車に乗り私の宿舎まで送り届けた。これはロシア皇帝以外、だれにたいしても示したことの無い歓迎ぶりだ。しかし健全なる判断力がある人なら、大統領がこのようにしたのはなにかの権力を恐れた故ではなく、彼自身がロシアで歓迎を経験し、エンペラーの威徳を恐れ、そのまねをただけだろう。

◎シャム国王としての自信

5月18日@ジュネーブ

美しい博物館があったが、おいてあるものはそれほど価値があるものとは思われなかった。しかし建物はそこにいた係官よりましだった。日本からきているのか、中国のものか、まったく知らなかった。多数のそうしたものがおいてあり、中国製と日本製がゴタメだだった。私たちに説明しようとしたが、こちらがもっときちんと説明すると信じようとしなかった。われわれのことを、他の西洋人と同様の浅薄なやつらだと思ったのだろう。私は笑わざるをえなかった。ただこれまで刊行されたすべての言葉のバイブルが集めてあったので、タイ語版のバイブルがあるので、一部送るといったら、彼はわれわれのいっていることが理解できないようだった。

7月18日@Solleftea, Northern Sweden

・・・翌日皇太子[後のグスタフ五世]とノルウェーの統治について話をした。彼は、すでに広く知られていることとして、彼らはリパブリックになりたがっており、唯一スウェーデンと共通である外交も分離したいと希望していることを明らかにした。……私は軍事力と財政について尋ねた。そしてなぜオーストリア=ハンガリーのようにしないのかと尋ねた。すると昔からこうなっており変更は難しいという。それで私は、昔からある古い慣習は変えるのが難しくそのままにしておくしかないこともあると述べた。これらの発言を皇太子が国王に告げると、国王は、大声を上げて、「もう終わりだ。すっかりなかまでお見通しだ。まったく奇妙だが、なぜタイ人がヨーロッパの中のことをこれほどよく知っているのだ」と叫んだという。

◎ヨーロッパの知識

7月22日付@バルト海 マハーチャクリー号でコペンハーゲンへ

ロンドンを訪問したチャイヤンと話した。いくつかの側面においては、彼の知識の方が豊富でよく知っているからだ。私の進み方は間接的であり、見聞きすることはみな王族や主人という狭い隙間から垣間見えることに過ぎない。あるいはさもなければ、見えることはつかの間光るものであって、博学といっても限られたことを知るに過ぎず、大方は無知である。

今回ヨーロッパで得るべきことは次の4つが挙げられよう。

1. ヨーロッパの生活をみること
2. 富とはどういうもので、どこでどのように生み出されているかをみること
3. 力、つまり敵を破壊し戦うことについてみること
4. 娯楽

これ以外、統治や政治、国家のことについては、本で読んだこと以外は、つかのまの訪問者が一朝一夕にわかることではない。

5月14日 @ベニス

ベニスにきたら、汚水をすてる排水パイプについて尋ねようと決意していたのだが、われわれと同じようにそのまま運河に捨てるという答えしか得られなかったことは大いに残念である。トイレがあちらこちらにあるのをみた。水上に突き出すように作ってあるものもあった。みな水中に垂れ流した。ただ寒いために、板で囲ってすっかりみえないところが異なる。…もう1つ異なる点は、ここが海水なので、飲み水にも水浴びにも使うことが出来ないし、臭いを消去するのも簡単であるということだ。しかし、いずれにせよ水は非常に汚い。

4. おわりに

・シヤムにおける近代国家形成とヨーロッパの帝国

B. アンダーソン 比すべきは“modernizing regime of colonial Southeast Asia”

「はるかなるシヤムの地では、ラーマ5世(チュラロンコン)が、その子供や甥たちをサンクト・ペテルブルグ、ロンドン、ベルリンの宮廷に送り、世界モデルの機微を学ばせた。彼は、1887年には、世界モデルの要請にしたがって、法定長子相続継承の原則を制度化し、かくして「シヤムを『文明化』した西欧の君主制と同列」に置いた」[アンダーソン 1997: 46]。

「さて、シヤムでは、明治天皇の同時代人、長きにわたってシヤムに君臨したチュラロンコン(在位 1868-1910)が、日本で彼と対等の地位にあった人々とはまるで違う遣り方で西洋膨張主義から彼の王国を防衛した。英領ビルマ、英領マラヤと仏領インドシナに挟まれ、彼は、まともな武力装置を建設する代わりに、抜け目のない巧みな外交に全力を傾注した。(国防省は1894年になるまで設立されなかった。)彼の軍隊は、ある意味では、18世紀ヨーロッパのごとく、主としてベトナム人、クメール人、ラオ人、マレー人、中国人の傭兵、夫役者をごたませに整列させたものだった。あるいはまた、教育制度の近代化によって公定ナショナリズムを推進しようという努力も、大して行われなかった。シヤム最初の大学は、1917年、つまり東京帝国大学創立の40余年後のことであった。にもかかわらず、チュラロンコンは近代化の推進者を白認していた。ただ、彼のモデルは、連合王国やドイツではなく、オランダ領東インド、英領マラヤ、インド帝国などの植民地官僚国家であった」[アンダーソン 1997: 163-4]。

なぜか? ⇒ チュラロンコンがみたヨーロッパの王朝?

アジアの文脈?

参考文献

- Anderson, Benedict R. O' G. 1978. "Studies of the Thai State: The State of Thai Studies." In *The Study of Thailand, analyses of knowledge, approaches and prospects in anthropology, art history, economics, history, and political science*, edited by Eliezer B. Ayal. Southeast Asia Series, no. 54, Athens: Ohio University Center for International Studies, pp.193-247.
- , 1997. 『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石きや・白石隆 訳) NTT 出版 [*Imagined Communities: Reflections on the Origins and Spread of Nationalism*. Rev. ed. London: Verso, 1991].
- Brossan, L. 1998. *King Chulalongkorn and Pope Leo XIII : Siam and the Vatican in the 19th century*. Bangkok: Catholic Mission of Bangkok.
- Chulalongkorn, King of Siam. 1962. *Phraratchahatthalekha mua sadet phraratchachamnoen praphat yurop pho so 2440*. 2 vols. Bangkok: Khurusapha.*
- , 1996. *Klai ban*. 2 vols. Bangkok: Cremation volume for Thongphap Phanitphat.
- 飯島明子. 1976. 「タイにおける領事裁判権をめぐる一保護民問題の所在」『東南アジア研究』14 卷1号.
- Kong cholmaihet haeng chat, Krom sinlapakon, Thailand. 1980. *Kansadet praphat yurop khong phrabat somdet phra chunlachomklao chaoyuhua ro. so. 116*. Bangkok:
- Laothong Amrinrat. 1979. "Kansong nakrian pai sukxa to tang prathet tangtae pho so 2411-2475 [The sending of students abroad from 1868-1932]." M.A. thesis, Chulalongkorn University.
- Lim, Patricia Pui-Huen. 2009. *Through the Eyes of the King: The Travel of King Chulalongkorn to Malaya*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Narenthonracha, Naiphaneek Mom. 2004. *Chotmaihet sadet phraratchadamnoen praphat thawip yurop khrang thi song* (phrabat somdet phra chunlachomklao chaoyuhua) ro. so. 125-126. Bangkok: Chulalongkorn Univeristy.
- Pellegi, Maurizio. 2002. *Lords of Things: The Fashioning of the Siamese Monarchy's Modern Image*. University of Hawaii Press.
- Pongsan Watthanangkun et al. ed. 2003. *Kansadet praphat yurop khrang thi 1 khong phrabat somdet phrachunlachomklao chaoyuhua pho. so. 2440*. [The first visit of King Chulalongkorn to Europe in 1897] Bangkok: Centre for European Studies at chulalongkorn University.
- Sachchidanand Sahai. 2003. *R. 5 Sadet india* (India in 1872: As Seen by the Siamese). Bangkok: The Foundation for the Promotion of Social Sciences and humanities Textbooks Project.
- Siahathep (Seng), Phraya, 1997 (1907). *Chotmaihet sadet praphat Yurop Ro So 116*. Bangkok: Krom Sinlapakon.
- 玉田芳史. 1996. 「チャクリー改革と王権強化: 官僚の変遷を手がかりとして」玉田芳史編『チャクリー改革とタイの近代国家形成』(重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No. 11.
- Wuthichai Munsin. 2000. *Phrabat somdet phra chunlachomklaochao yuhua sadet praphat yurop ro. so 116 (pho so 2440)*. Bangkok: Ton O 1999.
- Wyatt, David K. 1969. *The politics of reform in Thailand: education in the reign of King Chulalongkorn*, Yale University Press.